魅力を作る

全国でも現存する数の少ない桶屋。その桶屋の1つが川俣町にあります。「最期まで桶を作る」そう言って桶作りを続ける鴫原風呂桶店の鴫原廣（ひろし）さん（鉄炮町）にお話を聞きました。

Interview



鴫原風呂桶店の桶の愛用者

武藤 潔（きよし） さん（羽田）

鴫原さんの人柄が分かる そんな桶が大好きで――

数年前、家の裏にある小高い山に友人や親戚とゆっくり過ごすことができる憩いの場を作りたいと考え、そこに露天風呂を作ることになり鴫原さんに木製浴槽の作成を依頼をしました。檜で作った浴槽は香りも良く温かみがあって身も心も癒してくれます。

もともと鴫原さんには、風呂桶や飯櫃（めしびつ）を頼んでいましたが、釘や接着剤などを一切使わない鴫原さんの技術の高さやあたたかさは他にはないものだと木製浴槽を使って改めて実感しました。



木製浴槽と湯桶が鴫原風呂桶店のもの

老若男女に愛される桶

小学生の頃、桶屋だった父親の手伝いで桶を作り始めた鴫原さん。平成9年に父親が他界してから23年、今年で56年のキャリアになるといいます。鴫原さんが作る桶はお風呂で使われている湯桶やお墓で目にする花桶、旅館などで使われる木製浴槽など種類は様々です。

作られる桶はほとんどが手作業で、1個の木桶を作るのに最低3日、木製浴槽などの大きなものに関しては、半年ほどかかるといいます。現在、桶の注文は全国各地から届いており、1人で桶を作り続けています。

時代の流れとともに

昔は町内にも10軒近くあったという桶屋も今では鴫原風呂桶店の1軒のみ。「バブルの頃は需要があって休む暇もなく桶を作っていたけど、今はだいぶ少なくなった。今では価格や保存性、手軽さなどの理由からプラスチック製の桶に変わるものが増えて、手づくりの桶は採算が取れないこともあるからね」そう鴫原さんは話します。また鴫原さんは「今は太鼓や樽の修理など桶を作る以外の仕事もしないとやっていけないんだ」と厳しい現実と向き合っていました。

それでも桶を作る

それでも鴫原さんはこれからも桶を作り続けたいと話します。鴫原さんは嬉しそうに「50年以上やってるのに未だに挫折をすることがあるんだよ。やってもやっても桶を作る難しさは変わらない。でもすぐ成功してしまったらそこで成長することもないから。たくさん失敗して挑戦し続けることのできる桶作りが楽しいよ。何より俺が桶作りを辞めたら困る人がいるからね。『鴫原風呂桶店』の桶を必要とする人がいる限り、俺は桶を作り続けるよ」と笑顔で話してくれました。

